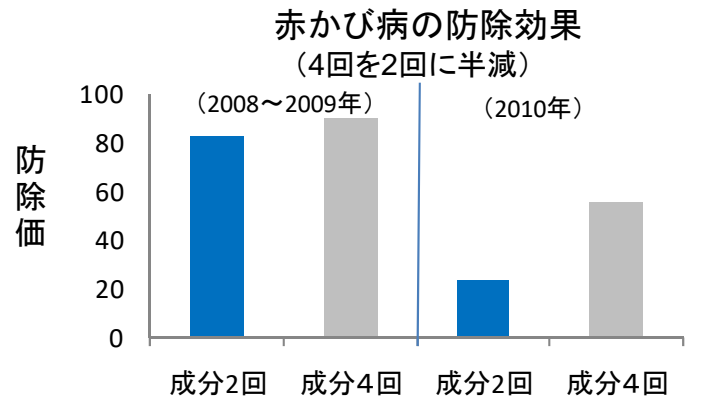
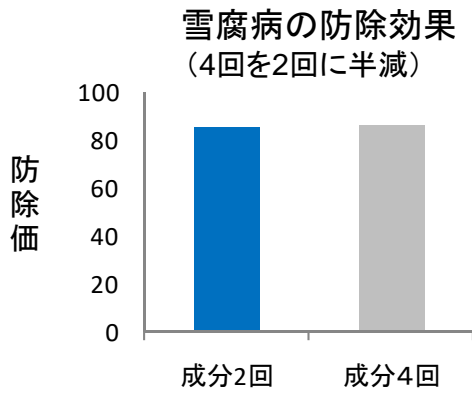


秋まき小麦栽培における化学肥料と農薬の半減技術

消費者の多様なニーズに対応し、国などの支援を受けて、化学肥料・化学合成農薬を慣行対比で5割以上削減する栽培が広がる一方、収量や品質の安定化が課題となっています。

農薬(化学合成農薬)の成分使用回数を半減すると?



赤かび病の防除効果が充分でない年もある。
(*M.nivale*が優先する2010年)

雪腐病および赤かび病に対する半減は概ね可能。
また、「きたほなみ」の栽培によって、うどんこ病および赤さび病に対する防除省略も可能。

化学肥料(窒素施肥量)の半減と堆肥による収量改善

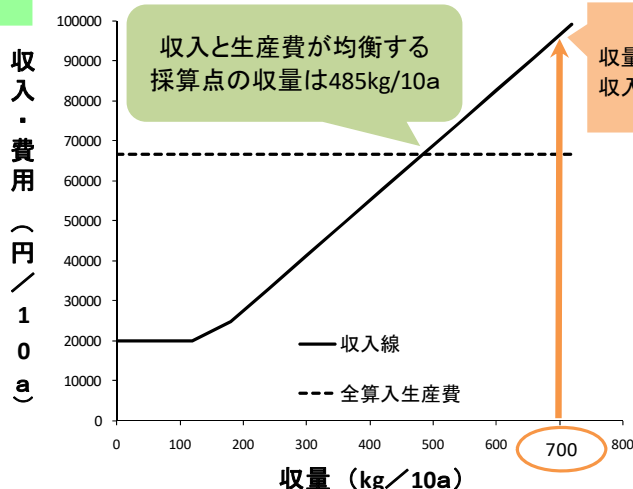
窒素施肥	防除	堆肥の施用と性状	窒素吸収量(kg/10a)			精麦重 2.2mm (kg/10a)	同左比 (%)	蛋白 (%)
			起生期	止葉期	成熟期			
慣行	慣行	-	2.3	12.2	15.4	681	100	10.4
半減	慣行	-	2.1	7.8	9.5	555	81	8.3
半減	半減	-	-	-	9.1	549	81	8.1
半減	半減	完熟	-	-	13.1	700	103	8.9
半減	慣行	未熟	2.4	9.4	11.7	653	96	8.7
半減	慣行	中熟	2.1	8.5	10.9	617	91	8.6
半減	慣行	完熟	2.5	11.7	12.1	644	95	8.9

窒素施肥を半減すると、
収量が2割程度低下し、
蛋白も低下する。

注) 窒素施肥の慣行は18~19kg/10a。堆肥は現物5t/10a施用。

堆肥の補填は、化学肥料・農薬半減栽培において収量を改善できる。
ただし、堆肥の補填によっても、蛋白は基準値(9.7~11.3%)を満たさなかった。

化学肥料・農薬半減栽培における堆肥の補填技術の経済性



堆肥の補填技術は採算点を上回る収量を実現。